

語種率・品詞率からみる 近代文語文の通時的変化

近藤 明日子

1 はじめに

日本近代語の文章史・文体史は言文一致運動による口語体の成立・定着によって特徴付けられる。その口語体は小説では明治30年代に一般化した。一方、実用文とも呼ばれる論説文・報道文等の非文芸ジャンルの文章において口語体が定着したのは大正期に入ってからであり、明治期は依然として文語体が主に用いられた。そして、明治初期には漢文訓読体・和文体・欧文直訳体等の複数の種類の文語体が行われたものが、しだいに融合し、明治後期に普通文と呼ばれる標準的な文語体が確立・定着したとされる。しかし、森岡（1991a, p.25）は、標準的ともされる普通文の実態は、漢文脈の濃厚な文体から和文脈・洋文脈の濃い文体あるいはこれらの混交した文体までさまざまあり、決して一つの統一した文体ではなかったと指摘する。

このような複雑な様相を呈する近代の文語体実用文の変遷の実態の一端を明らかにするため、本研究では明治・大正期の雑誌の大規模なコーパスである国立国語研究所（2019 予定）『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（短単位データ 1.2）¹（以下、『明治・大正編 I 雑誌』と呼ぶ）を資料として、基本的な文体指標である語彙の語種率・品詞率の通時的変化の分析を行う。近代の文語体実用文に関する先行研究は多くあるが、対象資料の規模や扱う期間および調査する言語項目の数に限りのあるものが多く、近代の長い期間の資料を用いて通時的変化を俯瞰するような研究はまだ多くはない²。本研究では、先行研究に示唆を受けつつ、語種率・品詞率という新たな観点から通時的変化を大局的に捉えることを試みる。

¹ コーパス中の『東洋学芸雑誌』データについては、2019年2月時点の開発段階のものを使用した。そのため、本研究で示す数値等は公開版とは異なる場合がある。また、コーパスデータの検索・集計はデータが収録されている国立国語研究所のデータベースを利用して行った。

² 先行研究中、比較的長い期間の資料に基づき網羅的に言語項目を調査・分析するものとして、明治期の小学校教科書の助動詞を分析する岡本（1980）、明治・大正期の新聞の文末表現を分析する進藤（1981, pp.245-270）、明治・大正期の小学校理科教科書や明治期の新聞の副詞・接続表現を分析する松崎（2006a・2006b）等がある。

2 調査対象データ

本研究で調査資料とする『明治・大正編 I 雑誌』は、明治・大正期の各年代の代表的な総合雑誌を収録した大規模なコーパスである。非文芸ジャンルの文語体の文章が大量に収録されており、当時の文語体実用文の通時的变化の計量的分析に適した資料である。『明治・大正編 I 雑誌』に収録されるサンプル³から、①ジャンルが「非文芸」（小説・戯曲・詩歌以外）⁴、②文語体地の文の延べ語数が 100 語以上⁵、③雑誌記事本体をテキストとする⁶、の 3 条件を満たす 3,188 サンプルを抽出し、サンプル中の文語体地の文を調査対象データとした。

表 1 に調査対象データの言語量を雑誌種類別に示す。雑誌種類とは、コーパスに収録された雑誌タイトルと刊行年による分類で、11 種類を設定した。

³ サンプルとは、言語資料をコーパスに収録する際、テキストを適宜一定の範囲で分割した、その各範囲のこと。『明治・大正編 I 雑誌』では雑誌の記事を単位としてサンプルが設定されている。以下、『明治・大正編 I 雑誌』の設計の詳細については、『明治・大正編 I 雑誌』のウェブページ (https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/ch/meiji_taisho.html) を参照のこと。

⁴ 『明治・大正編 I 雑誌』では各サンプルにジャンル情報（小説・戯曲・詩歌のサンプルは「文芸」、それ以外のサンプルは「非文芸」）が付与されており、それに基づき「非文芸」ジャンルのサンプルを抽出した。

⁵ 語数のカウントに際し、語の単位は『明治・大正編 I 雑誌』の設定する「短単位」とし、1 短単位 = 1 語としてカウントした。なお、本研究では語数には記号・未知語の類は含まない。また、『明治・大正編 I 雑誌』では、各短単位に文体や本文種別に関する情報が付与されており、それを利用してサンプル中の文語体地の文の短単位を抽出しカウントした。

⁶ 『明治・大正編 I 雑誌』には記事本体をテキストとするサンプル以外に、雑誌本体の構造要素を扱うサンプル（サンプル ID の下 3 桁が「000」）が収録されている。このサンプルは調査対象から除外した。

表 1 調査対象データの言語量

| 雑誌種類 | 雑誌タイトル | 刊行年 | サンプル数 | 延べ語数 | |
|------|--------|-----------|-------|-----------|--------------|
| | | | | 全体 | 助詞・助動詞 除く |
| 明六 | 明六雑誌 | 1874・1875 | 149 | 157,357 | 97,730 |
| 東洋 | 東洋学芸雑誌 | 1881・1882 | 117 | 190,218 | 117,268 |
| 国民 | 国民之友 | 1887・1888 | 1,064 | 836,091 | 500,868 |
| 太陽Ⅰ | 太陽 | 1895 | 582 | 1,338,374 | 854,752 |
| 太陽Ⅱ | 太陽 | 1901 | 407 | 1,286,993 | 806,712 |
| 太陽Ⅲ | 太陽 | 1909 | 245 | 583,262 | 365,961 |
| 太陽Ⅳ | 太陽 | 1917 | 75 | 210,995 | 140,289 |
| 太陽Ⅴ | 太陽 | 1925 | 15 | 4,135 | 3,662 |
| 女雑 | 女学雑誌 | 1894・1895 | 462 | 381,916 | 236,146 |
| 女世 | 女学世界 | 1909 | 71 | 47,492 | 29,395 |
| 婦俱 | 婦人倶楽部 | 1925 | 1 | 203 | 118 |
| 計 | | | 3,188 | 5,037,036 | 3,152,901 |

雑誌種類は読者層の性別により二つのグループに分けられる。一つは「明六」「東洋」「国民」「太陽Ⅰ」「太陽Ⅱ」「太陽Ⅲ」「太陽Ⅳ」「太陽Ⅴ」の8雑誌種類で、男性の知識層を主な読者層とする⁷。もう一つは、残る「女雑」「女世」「婦俱」の3雑誌種類で、女学生や職業婦人といった知識層の女性を主な読者層とする⁸。次節以降の分析結果に見られるとおり、両グループ間には特に語種率のありように大きな差異が見られる。

なお、各グループにおいて1909年以降言語量が急減するのは、当時、口語体の拡大・定着に応じて文語体が縮小・衰退していったことの反映である。1925年の「太陽Ⅴ」「婦俱」に至り、非文芸ジャンルのサンプルで文語体はほぼ用いられなくなっていたことが分かる。この言語量の少ない「太陽Ⅴ」「婦俱」については次節以降の分析結果の扱いに注意が必要である。特に「婦俱」は言語量が極めて少なく分析に堪えないと考え、以下の考察ではとりあげない。

3 通時的变化

3.1 語種率の通時的变化

まず、語種率の通時的变化を見ていく。調査対象データ中、語種は7種類⁹に分類されるが、その中の主要な4語種（漢語・和語・外来語・混種語）についてサンプル単位の

⁷ 『国民之友』の読者層については有山（1986）、『太陽』の読者層については永嶺（1997、pp.101-132）を参照のこと。

⁸ この3雑誌種類の読者層については田中（2006）を参照のこと。

⁹ 「和（和語）/漢（漢語）/外（外来語）/混（混種語）/固有（固有名）/記号/不明」の7種類。

比率の分布を雑誌種類ごとに箱ひげ図で示したものが図1である。なお、語種率の分析では、助詞・助動詞は対象外とした。

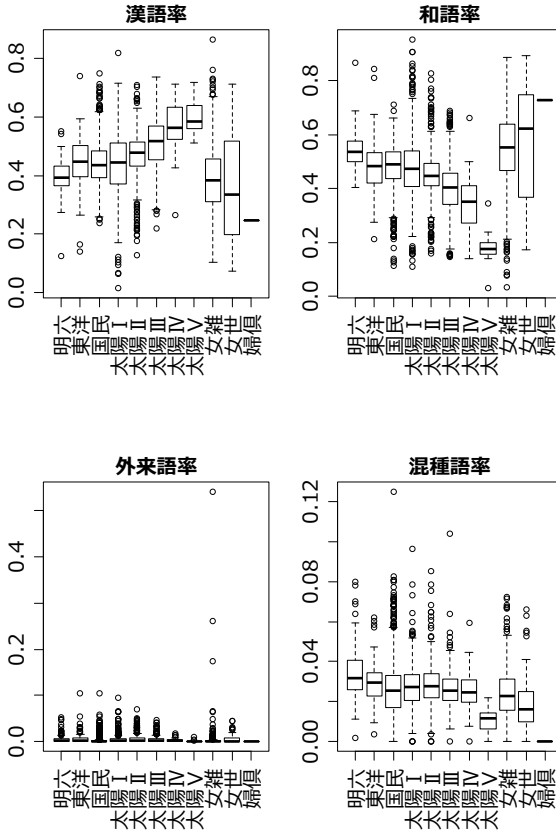


図1 語種率の分布

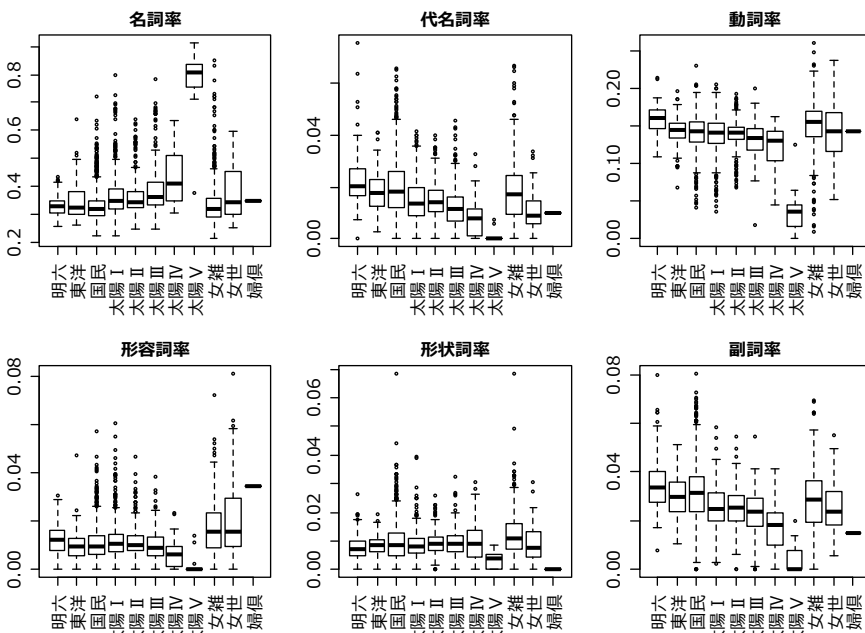
図1によると、読者層が男性の雑誌種類は、漢語率が増加し和語率が減少する通時的変化が見られることが分かる¹⁰。一方、読者層が女性の雑誌種類は、逆に漢語率が減少

¹⁰ 田中 (2010) では「明六」「国民」「太陽I」～「太陽V」の漢語率について1909年以降減少するとしているが、これは口語文・文語文あわせての分析であり、そこで見られる漢語率の減少は、文語文よりも漢語率の低い口語文の拡大に応じた現象と考えられる。また、森岡 (1991b, pp.381-382)

し和語率が増加する通時的変化が見られる。そして、読者層が女性の女性種類は読者層が男性の雑誌種類と比較して漢語率が低く和語率が高い傾向が見られる。このように読者層の性別の違いにより語種率の傾向は全く異なる様相を見せる。

3.2 品詞率の通時的変化

次に、品詞率の通時的変化を見る。調査対象データ中、品詞は大分類で13種類に分類されるが、その13種類についてサンプル単位の比率の分布を雑誌種類ごとに箱ひげ図で示したものが図2である。



の明治～昭和期の新聞での調査で和語率は増加するとしているが、これも文語体・口語体あわせての分析である。

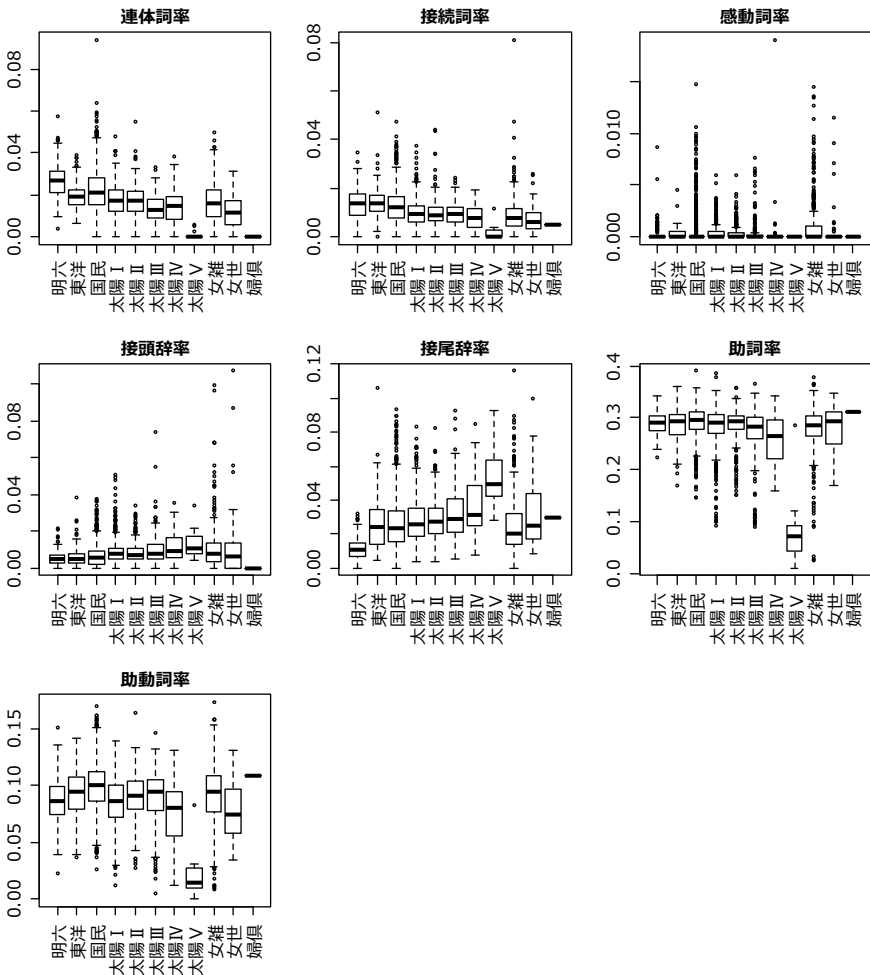


図2 品詞率の分布

図2によると、読者層が男性の雑誌種類は、名詞・接頭辞・接尾辞の比率が増加し、代名詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞・接続詞の比率が減少する通時的変化が見られる。また、読者層が女性の雑誌種類は、名詞・接尾辞の比率が増加し、代名詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞・接続詞・助動詞の比率が減少する通時的変化が見られる。このように品詞率については読者層の性別の違いにかかわらず同様の傾向を見せる。

4 考察

前節で見た語種率・品詞率の通時的変化や読者層の性別に対応した傾向の差異が生じた背景について、読者層の性別別に雑誌種類を分けて考察する。

4.1 読者層が男性の雑誌種類の考察

最初に、読者層が男性の雑誌種類について見ていく。

まず、名詞率が増加し、動詞・形容詞・副詞・連体詞・接続詞の各比率が減少する通時的変化について考察する。樺島・寿岳(1965, pp.16-49)は、自立語の品詞を名詞(N)、動詞(V)、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞(M)、感動詞・接続詞(I)の4組に分け、大正・昭和期の小説の調査から、Nの比率が増加すればV・M・Iの比率は減少することを示し、また、少ない文字数に多くの意味を盛り込まなければならない要約的文章では名詞率が大きい傾向が見られるとした。

読者層が男性の雑誌種類における品詞率の通時的変化は、樺島・寿岳(1965, pp.16-49)のいう名詞率とそれ以外の品詞率との関係に合致する。また、名詞率の高いサンプルを見ると、次の(1)~(4)のように事実を客観的に記述した報道文である場合が多く、樺島・寿岳(1965, pp.16-49)のいう要約的文章に通じる性質を持つものである。

- (1) 又各地よりの電報は左の如し 長崎三十日午後七時晴雨計 三〇、〇七英寸寒暖計 六二度風力 二三英里方位 南晴雨計最低は午後七時 和歌山三十日午後六時晴雨計 三〇、二〇英寸寒暖計 六〇度風力 一三英里方位 南南西晴雨計は沈降中 同所三十一日午前六時晴雨計は沈降中 (60M 東洋 1882_05007 「[雑報]」 0.64) ¹¹
- (2) 支那西洋開化之差別 有賀長雄氏著 京都 大黒屋書舗發兌 日本商業教育論 高橋義雄氏著 東京 金港堂發兌 家計簿記法例題 藤尾録郎氏編 東京 經濟雜誌社發兌 英和書尺牘書法 井上十吉氏著 東京 吉岡商店出版支那西洋開化之差別は歴史上の事實を證據として東西兩洋の文明の相異なる所以を論じたり〇日本商業教育論は商人にも學問の必要なる所以を論じたるものにて町人丁稚の爲めには心得となるべき書なり (60M 国民 1887_09018 「新刊雜書」 名詞率 0.62)
- (3) 〇政治法律◎伊藤首相歸京 久しく熱海大磯にて療養中なりし伊藤侯は客臘十日歸京せり◎臨時首相解任 上記に付伊藤侯は客冬十二月十一日徳大寺侍從長の手

¹¹ 例文の引用に際し、末尾の()内にサンプルID・記事タイトルおよび必要な品詞率・語種率を示す。

を経て執奏を請ひ、左の如く西園寺侯の解任手續を爲せり。樞密院議長侯爵 西園寺公望内閣總理大臣臨時代理免らる (60M 太陽 1901_01060「海内彙報」名詞率 0.63)

- (4) 解答方法 一、解答は東京市赤坂區青山北町五ノ二〇金易二郎 解答方法 一、解答は東京市赤坂區青山北町五ノ二〇金易二郎氏宛に送ること 一、解答は手順を明記し、變化あるときは合せ記入すること 一、締切七月三十一日限 一、解答は七月號の本誌にて發表す (60M 太陽 1925_09079「懸賞詰將棋新題」名詞率 0.83)

このような報道文は名詞率 0.5 以上のサンプルに集中する。図 3 は雑誌種類ごとのサンプル単位の名詞率の分布をヒストグラムで表したものだが、「明六」では名詞率 0.5 以上のサンプルが見られないのは、「明六」には報道文のサンプルがないことを背景としている。そして、図 3 によると名詞率 0.5 以上のサンプルが年を経るにつれ次第に増加し、「太陽Ⅳ」「太陽Ⅴ」ではその傾向が顕著になる。

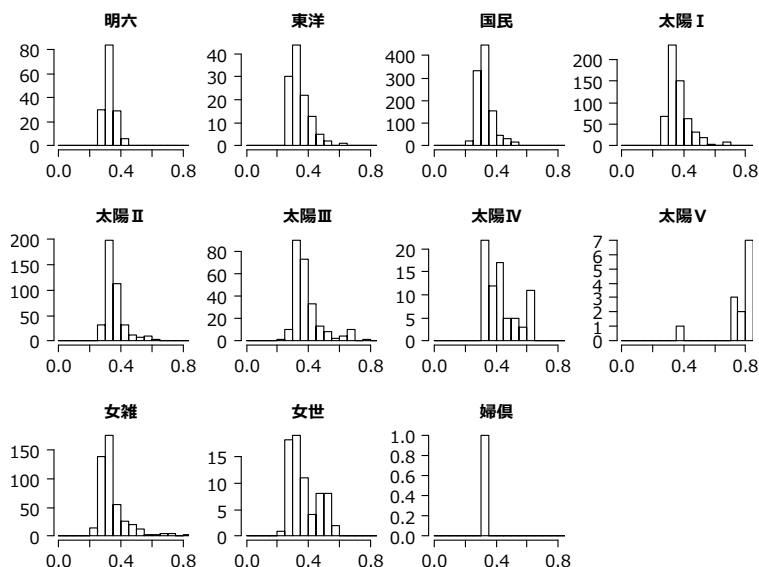


図 3 名詞率の分布

一方、名詞率の低いサンプルでは、次の(5)~(9)のような、ある事柄について著者が主

張を述べる論説文が多く見られ、報道文はほとんどない。

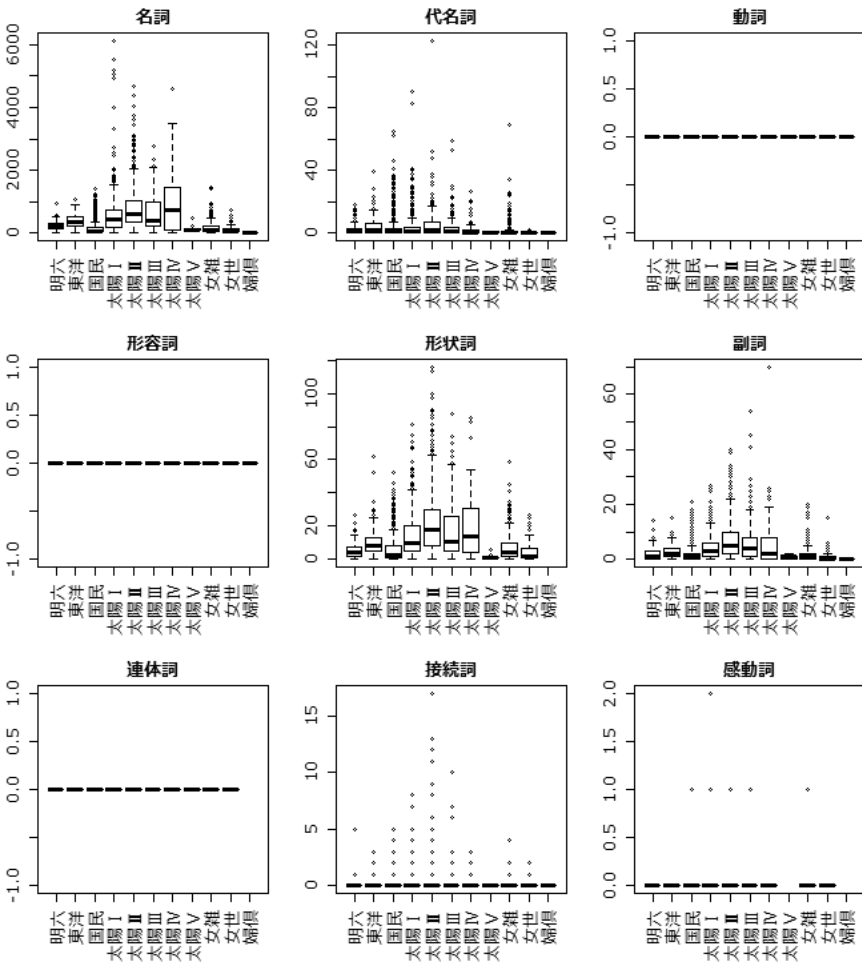
- (5) 刑に死刑あるは猶罪犯審問の法に拷問あるが如き敷拷問の其法を失したるは余業已に屢之を論ぜり今請ふ死刑の刑に非る所以を説明せん夫れ刑は人の罪惡を懲す所以なり懲るとは何んぞ曰く犯人惡事の罪業たる罪業の畏るべきを知りて之に懲り之を悔ひ善道に復歸するなり (60M 明六 1875_41001「死刑論」名詞率 0.27)
- (6) 學術研究に最も必要なる事の一は、其名辭の確當なるは是れなり、更に之を云へば、同一の名辭は常に同一の意義を表はさしめ、二三の事に通用せしむ可からず、又同一の事物は常に同一の名辭を以て之を指し、一物に數名有らしむ可らず、(60M 東洋 1882_08003「學術上の譯語を一定するの論」名詞率 0.26)
- (7) 谷氏果然其の職を辭せり、心なき人は何とも云はば云へ、吾人は實に其の出處進退に於て、毅然たる大丈夫の動作に孤負せざるを信ず、谷氏朝を去る、然れども其の意見は朝を去らず、豈にただ朝のみならんや、顧ふに一篇の意見書は恰も噴火山の如く、万丈の光焰を吐き來りて、天下の人心を警醒作興せり、(60M 国民 1887_07008「谷氏果然其の職を辭せり」名詞率 0.23)
- (8) 太陽には社會改良意見を連載し來りしも、久しきことながら、何れも教育を以て、根本より改良するの外なしといふに歸着せざるはあらず。文部省が、新中學令に於て、音樂の一科を加へたるは、中學生をして、優美健全なる音樂の趣味を解せしめ、卑猥なる俗歌俗曲の爲めに、動もすれば導かれて、其嗜好の正當を誤まる如きの弊を一新せんとの希望に外ならず。(60M 太陽 1901_04016「社會の腐敗救治意見」名詞率 0.25)
- (9) 電車ばかり世に簡便廉價なるものはあらず、貧しきものと、富めるものと、貴きも、賤きも、みな此便利なる文明の器械によらざるは希なり、加之近ごろは運轉手もよくなれて、怪我人も少なく、車掌も段々丁寧になりしは喜ばしき事なり。(60M 太陽 1909_11051「牛門隨筆」名詞率 0.33)

以上のことから、名詞率の増加という通時的変化の背景の一つとして、文語体実用文の内容が、名詞率の低い論説文から名詞率の高い報道文に変化していったことが考えられるのである。

次に漢語率の増加について考察する。樺島(1963)は大正・昭和期の小説の調査で、漢語文節の比率が増すと名詞文節の比率も増す傾向が見られ、漢語の比率は名詞文節によって強く支配されるとした。延べ語数に対して最も比率の高い品詞は名詞であることから、その名詞の漢語率が全体の漢語率に最も強い影響力があるのは当然と言える。本研究の調査対象データでは、活用語の語種は和語・混種語のいずれかであり漢語とはし

ない設計のため、自立語のなかで名詞の次に比率の高い動詞の漢語率は全体の漢語率に影響力を持たず、名詞率が漢語率に与える影響はいつそう強い。よって、漢語率の増加の背景として、名詞率の増加が第一にあげられることは疑いない。

ただし、品詞ごとにサンプル単位の漢語率の分布を箱ひげ図で表した図4から、名詞・形状詞・接頭辞・接尾辞で漢語率の増加する通時の変化が見てとれることから、全体の漢語率の増加は、名詞率の増加のみを背景とするのではなく、語彙自体の漢語率の増加という通時の変化ももう一つの背景となっていることがうかがえる。



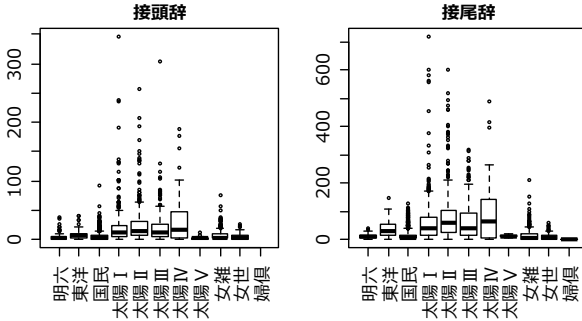


図 4 品詞別漢語率の分布

最後に、接頭辞率・接尾辞率の増加について触れておく。これは、図 4 に見られる接頭辞・接尾辞の漢語率の増加傾向と合わせて、野村（1981）・松井（1987）という近代語における字音接辞の進展を反映したものであり、それが具体的な数値として確認できたものと考えられる。

4.2 読者層が女性の雑誌種類の考察

次に、読者層が女性の「女雑」「女世」について考察する。最初に、名詞率の増加について見ると、読者層が男性の雑誌種類同様、文語体実用文の内容が論説文から報道文に変化していったことが背景の一つとして考えられる。図 3 から「女世」のほうが「女雑」よりも名詞率の高い区間に多くのサンプルが分布していることが分かるが、このような名詞率の高いサンプルは次の(10)(11)のような報道文で占められる。

- (10) ○寄付金件 今回朝鮮事件に關し本社事業費の内金品寄付申出たるもの左の如し
一 晒木綿三十段 廣島縣正社員 青盛數馬 兵庫縣正社員 三崎安二郎 同 三崎弘造 一金五拾圓 同 小谷廣吉 同 加納辰三 一金壹圓 宮城縣 鈴木志惠 一金壹圓 同 亙理きう 一梅千五樽 三斗入 (60M 女雑 1894_32016「日本赤十字社録事」名詞率 0.85)
- (11) 麴町區下二番町に在りし女子音樂園は、今般豐多摩郡下澁谷に移轉新築せしにつき、五月六日午後二時より落成式を舉行せり、園主松山溢子刀自の開會の辭に次で加藤弘之の祝詞（代讀）、坪井、三宅、兩博士及び青木文造氏の演説あり、其よりのピアノ、ヴァイオリン、合唱、箏、等生徒の演奏、數番あり、(60M 女世

逆に名詞率の低いサンプルには次の(12)(13)のような論説文が多く見られる。

- (12) 断えず人を怨んで不平勃々たる者よ。試ろみに問はん、汝、一人にても心を許して身を托せんとするの友ありや。汝は曰はんとす、世に知己なしと。左れど、汝に問はん、抑そも汝が知り、汝が尊とみて、仕へんとするの長者はありやと。汝は曰はんとす、一人もなしと噫、あはれむべし、此種の人。(60M 女雑 1894_34008 「人相ひ評するを聴く」 名詞率 0.26)
- (13) 人は能く言ふ、我が理想は斯の如し、我れは斯の如くありたしと。なれど其の能く實現されたるもの世間果して幾人かある。舅姑のなき家に嫁がんと思ひしものも、實際は、之れあるのみならず、兄弟姉妹其他親族の同居さへする家に婚を結び、又富裕なる人にと思ひ居りしものも、家もなく、衣も乏しく、食さへ豊かならざる悲運に陥り居るは、世間なべての例にあらずや。(60M 女世 1909_13032 「修養手引草」 名詞率 0.27)

次に漢語率の減少について考察する。これは、読者層が男性の雑誌種類とは逆の変化である。また、漢語率は減少しても名詞率は増加しており (図 2)、樺島 (1963) のいう名詞率と漢語率の関係とも合致しない。図 5 は雑誌種類ごとにサンプル単位の漢語率の分布をヒストグラムで表したもののだが、「女世」では特に漢語率の低い区間にサンプルが多く分布していることがわかる。

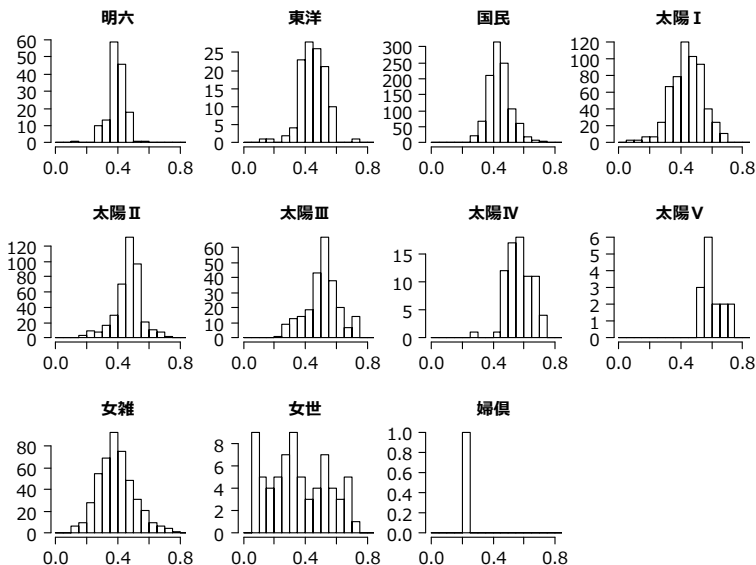


図 4 漢語率の分布

この「女世」の漢語率の低いサンプルのほとんどは次の(14)のような読者投稿による随筆文である。

- (14) 今様の紫式部とやらん、自稱仕給へる君の手帖、緋けば源氏物語の其れにも似通はぬ、亂れたる水莖の跡、石山寺の月に妙筆を振るひ給ひしかの君に聞かれなば、美しくしき眉をいかばかりよせ給ふか、葦式部と稱へたらん方ふさはしからん、こき薄きの色のほどは知るよしもなけれど、いづれ紫には變り有るまじ、(60M 女世 1909_08056 「むらさき帖」 漢語率 0.07)

このような読者投稿のサンプルは「女雑」にはなく「女世」に特徴的なものである。このサンプル群の存在が「女世」の漢語率の分布に大きな影響を与え、「女雑」から「女世」にかけて漢語率が減少しているように見えているものである。

最後に、読者層が女性の雑誌種類の漢語率が、読者層が男性の雑誌種類よりも低いことについて考察する。特に漢語率の低いサンプルが多い「女世」だけでなく、「女雑」も図 5 に見られるように読者層が男性の雑誌種類よりも漢語率の低い区間にサンプルが分布する。この背景として読み手の性差が考えられる。女性は主に和文を読み書きし漢文

訓読系の文章とは疎遠であった歴史があり、それが近代の文語文においても続いていたということである。それは、(12)(13)のような論説文においても(14)のような随筆文においても同様に見られる傾向であったと考えられる。

5 おわりに

以上、本研究では、近代の文語体実用文の通時的変化の実態を明らかにすることを目的として、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』の非文芸ジャンルのサンプルの文語体地の文を資料とし、語種率・品詞率の通時的変化について分析・考察した。そこから明らかになった主な点を以下にまとめる。

- ① 名詞率の増加が見られる。その背景として、文語体実用文の内容が論説文から報道文に移行したことが考えられる。
- ② 読者層が男性の雑誌では漢語率の増加が見られる。その背景として、①にあげた名詞率の増加が第一にあげられる。それに加えて、語彙自体の漢語率の増加も背景として考えられる。
- ③ 読者層が女性の雑誌では読者層が男性の雑誌より漢語率が低い傾向が見られる。その背景として、女性と和文体との対応関係の存在が考えられる。
- ④ 接頭辞率・接尾辞率の増加が見られ、近代語における字音接辞の進展という事象が数値として確認できる。

本研究では、文語体実用文における漢語率の増加という通時的変化の背景として、名詞率の低い評論文から名詞率の高い報道文へという文語体実用文の内容の通時的変化が大きいことを明らかにした。漢語率の増加というと、漢語語彙の進展という当時を特徴づける語彙の通時的変化がまず思い浮かぶが、当時の文章のありようの変化にも着目する必要があることが確認できた。今後は、語種率・品詞率以外の観点も加え近代文語文の通時的変化を多角的に分析するとともに、口語文との比較を交えて、実態の更なる解明を進めていきたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16K02750 「形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究」および国立国語研究所言語変化研究領域共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一部である。

参考文献

- 有山輝雄(1986)「言論の商業化—明治20年代「国民之友」—」『コミュニケーション紀要』4, pp.1-23
- 岡本勲(1980)「明治文語の助動詞の位相」『中京大学文学部紀要』15(2), pp.53-98
- 樺島忠夫(1963)「漢語をめぐる」『計量国語学』27, pp.14-19
- 樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文体の科学』
- 国立国語研究所(2019 予定)『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位データ 1.2)
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html
- 進藤咲子(1981)『明治時代語の研究—語彙と文章—』明治書院
- 田中牧郎(2006)『近代女性雑誌コーパス』の概要『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(B)「20世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述』pp.55-62 (http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/19w-mag-summary.pdf よりダウンロード可能)
- 田中牧郎(2010)「雑誌コーパスでとらえる明治・大正期の漢語の変動」『国際学術研究集会 漢字漢語研究の新次元 予稿集』pp.56-63
- 永嶺重敏(1997)『雑誌の読者の近代』日本エディタースクール出版部(オンデマンド版, 2004による)
- 野村雅昭(1981)「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』49(10), pp.22-34
- 松井利彦(1987)「漢語の近世と近代」『日本語学』6(2), pp.25-36
- 松崎安子(2006a)「明治期の文語文の類型—小学校理科教科書を対象として—」『文化』70(1-2), pp.92-105
- 松崎安子(2006b)「明治期の新聞における文語文記事の文体類型—小学校理科教科書の文体との比較から—」『文芸研究—文芸・言語・思想—』162, pp.11-22
- 森岡健二(1991a)『近代語の成立—文体編—』明治書院
- 森岡健二(1991b)『改訂近代語の成立—語彙編—』明治書院

(こんどう あすこ 大学院人文社会系研究科 博士課程3年)